



## 香港便り その29

ア

アジアで最大の現代美術館である「M+」が開館2周年を記念して無料開放されていたので、休日をごそで過ごすことにした。「M+」はアジアのヴィジュアルアートに特化した美術館で、特に中国人アーティストの作品は文化大革命前後から中国現代アートを網羅するようにアーカイブされている。

かなり尖った現代アートから政治的メッセージを含むもの、さまざまな作品がある中、とあるブースで50年代に創られた「白毛女」というバレエの映像が繰り返し流れていた。やはり踊りに関わるものとあればふと足が止まる。女性がライフルを持ちダイナミックな踊りを舞い、軍服を着たダンサーたちが一糸乱れぬ群舞を披露している。

「白毛女」はプロパガンダ・バレエに分類される。プロパガンダ・バレエはプロレタリア・バレエともいえ、労働者や民衆に焦点が当てられたバレエで旧来の古典バレエのテーマとは一線を画す。特に旧ソ連やその他の共産圏で盛んに演出され、中国でもそれに倣うように「白毛女」が創られた。一方で西側のバレエ界はそ

れらのプロレタリア・バレエを見るに耐えられないものとして毛嫌いしてきた。政治的過ぎるとしてアート作品失格の烙印を押ししてきたのだ。確かに古典バレエに親しんだ僕もダンサーとして好んで踊りたいとは思わなかった。だが果たして、プロレタリア・バレエは悪なのか。プロレタリア・バレエにも良いところがある。一つに役のキャラクターが自然体であること。プロンドの王子を演じる必要はなく、地に足を付けた人間的なキャラクターを演じることができる。

そして最大のポイントが女性の描かれ方である。古典バレエにおいて女性はお姫様で、ただ可憐に生きているだけで、ハッピーエンドになるには常に男性の救いが必要とする。「眠れる森の美女」「白鳥の湖」しかり王子を待つことが女性バレリーナの役割だ。しかし、プロレタリア・バレエである「白毛女」、そして旧ソ連の「ローレンシア」「パリの炎」などでは、女性が自らの手で武器を取り、戦い、自由を勝ち取るのだ。女性が男性的役割を押し付けられているという批判もあるが、社会主義的平等という名の下、女性の役割が飛躍的にバレエの中でも向上しているのは間違いない。

19世紀末に創られた古典バレエも当時の権威主義を強化するためのいわば、プロパガンダ・バレエであった。言ってみれば何を宣伝するか、どのような価値観を反映したいかの違いである。プロレタリア・バレエを切り捨てるだけでなく、そこから何か得られるものもあるだろう。

つい先日、広州で中国全土のバレエ団が集まる記念コンサートに参加した。多くの芸術監督が集い、挨拶をしたがその半数は女性であった。もしかすると「白毛女」の功労かもしれない。

プロパガンダ・バレエは悪か？

文 高野 陽年

text by Yonen Takano

### Profile

2011年にロシアの名門ワグノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアシヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。ヨーロッパ、北米、日本を含めさまざまな劇場における公演で主役を務めた。そして2021年7月より香港バレエ団に活動の拠点を移し、さらに活躍の場を広げている。立教大学中退。

